

# 【高校生の部受賞作】

## 子安講からみる千葉県山武市平野部の文化と地域コミュニティ

筑波大学附属駒場高校 2年 長谷川 幸裕

### I はじめに

筆者は、2021年6月に学校公認の同好会「地域振興研究会」を設立して以来、「地方の未来について考える」ことを目標に、代表者として研究活動やフィールドワークを主宰している。その傍ら、会の同期の勧めで地域の文化や「講」について興味をもち、九十九里平野における文化の伝播をテーマに複数回の実地調査を行うとともに、秩父市の念仏講や市原市の出羽三山信仰等に関する、住民への聞き取り調査に取り組んできた。本研究は、これまでの活動で得た知見をもとに、九十九里平野の中央部に位置する千葉県山武市において、現地に広く浸透している子安講の現状について、単独で調査を行ったものである。

子安講は、安産や子育ての安全を祈願する宗教的側面にとどまらず、女性たちが集まって雑談や情報共有を行う息抜きの場として、全国の農村社会で広く受容されてきた貴重な民俗行事である。その分布は九十九里平野においても例外ではないが、こと同地における調査記録は散発的なものに留まっており、近年の子安講の現状については不明瞭な点が多い。これを少しでも明らかにすべく、本研究では、平野中央部に位置する山武市をテーマとして、計55の地区で住民への聞き取り調査を実施した。本稿では、山武市周辺の子安講に関する既存研究の成果と問題点を整理するとともに、現地調査の結果を参考に、現地の地域コミュニティにおいて子安講が果たしてきた役割と、その現状について多少の考察を加えたい。

### II 山武市平野部の文化的特性

#### II-1 山武市の地理

千葉県山武市は、千葉県東部に位置する自治体で、48,645人（2023年8月1日現在）の人口を有する。山武郡の一部を構成していた、山武町・成東町・松尾町・蓮沼村の4町村の合併により、2006年に誕生した比較的新しい自治体であり、市域は国道126号線を大凡の境として、下総台地に属する丘陵地帯と、九十九里平野に属する平野部の地域に二分される。両者は伝統的に異なる産業・文化の構造をもつが、今回の研究では、平野部の地域（旧成東町・松尾町・蓮沼村域）を対象を絞って調査を行った。山武市の平野部は古くからの農業・漁業地帯である一方、戦後は一部で工場や住宅地の開発が行われているほか、旧蓮沼村域を中心に、海水浴場やレジャー施設を軸とした観光業の展開もみられる。



【図1】山武市の位置  
(地理院地図をもとに筆者作成)

## II-2 九十九里平野の中の山武市域

山武市域を含む九十九里平野は、北は旭市、南は長生郡一宮町に達する、南北約60km・東西5~10kmの細長い平野である。海岸に接する広大な砂浜は九十九里浜と呼ばれ、昭和30年代までは全域で地引き網漁が盛んであった。九十九里浜の名は、源頼朝が1里ごとに矢を立てて測量を行ったところ、99本に達したことに由来するとされるが、この際に中間地点となったのが、山武市の箭挿神社（旧蓮沼村）の位置であったという。

このように、地理的には九十九里平野の中央部に位置する山武市であるが、所在する寺院の宗派に着目すると、複数の文化圏の境界部に位置することが推測される。下に掲げる〔表1〕は、千葉県が公開している宗教法人名簿<sup>1)</sup>をもとに、平野内（JR線より海側の地域）に位置する寺院の宗派について、構成割合を自治体ごとに整理したものである。

〔表1〕九十九里平野の寺院の宗派構成（単立寺院を除く）

宗 派	上 総 国					下 総 国							
	旧 一宮町	長 生 郡 長生村	茂原市	白子町	大網白里市	東金市	旧成東町	旧蓮沼村	旧松尾町	旧横芝町	旧光町	匝 瑳 郡 匝瑳市	旧海上郡 旭市
[平安仏教]	天台宗	33.3%	--	8.3%	--	--	20.0%	--	73.3%	88.9%	--	12.0%	5.0%
	真言宗智山派	--	--	--	--	--	60.0%	--	--	11.1%	87.0%	84.0%	90.0%
[浄土宗系]	浄土宗	--	--	--	--	--	--	100.0%	--	--	13.0%	--	--
	日蓮宗	--	33.3%	16.7%	41.2%	19.0%	12.5%	5.0%	--	13.3%	--	4.0%	--
[日蓮宗系]	法華宗本門流	33.3%	66.7%	25.0%	17.6%	28.6%	4.2%	--	--	--	--	--	--
	顕本法華宗	--	--	41.7%	41.2%	47.6%	75.0%	15.0%	--	13.3%	--	--	--
その他の宗派	日蓮正宗1		豊山派1		日蓮正宗1	日蓮正宗1						大谷派1	本願寺派1
寺院数計	3	21	12	17	21	24	20	3	15	9	23	25	20

※ 旧成東町、旧蓮沼村、旧松尾町→現山武市（2006年合併） 旧横芝町、旧光町→現横芝光町（2006年合併）

九十九里平野全体に目を向けると、寺院の宗派には、南北で顕著な差がみられることがわかる。旧下総国にあたる匝瑳・海上郡域は、大半の寺院が天台宗・真言宗智山派に属する一方、東金市以南の各自治体では、ほぼ全ての寺院が日蓮宗系の宗派に属している。これは、15世紀末に土気城（千葉市緑区）・東金城等に進出し、平野南部を勢力下に収めた武将酒井定隆が、それまで平安仏教が多くを占めていた領内の寺院に対し、法華宗への改宗を命じたことに由来するものである。以降当地は現代に至るまで、きわめて大規模・高純度で日蓮門徒が集まる地域として知られており、その領域が概ね7里四方に及ぶことから、七里法華の名で広く知られている。

山武市域においては、天台宗・真言宗寺院が多数を占めつつも、一定数の日蓮宗寺院が存在し、それぞれの勢力圏の南限・北限となっていることがわかる。また、そのほか特筆に値するのは、村内の3ヶ寺全てを浄土宗が占める蓮沼村である。『千葉県の地名』<sup>2)</sup>によれば、これは正嘉元年（1257）、当地の領主石橋光宗が、旭市丘陵部の鎬木で布教していた僧然阿に帰依して極楽寺（現山武市蓮沼ハ）を創建したのが端緒といい、往時は村内の9ヶ寺全てを極楽寺とその末寺が占めたという。九十九里平野の浄土宗寺院は、旧光町の木戸地区と蓮沼村のほかに例がなく、山武市域がもつ宗教的多様性が窺える。

## II-3 平野部における開拓と分村

九十九里平野は、縄文海進後に形成された新しい平野で、中世以前はその殆どが低湿地帯であったが、僅かな微高地に住んでいた人々が、中世から近世にかけて一帯の開拓を進め、分村を繰り返しながら漸次人口を増加させていったものと考えられている。また、江戸時代に地引網の技術がもたらされると、海岸沿いの集落では半農半漁の生活が行われるようになり、当時年間2mの速度で

後退していた海岸線を追うようにして、微高地から海側へと分村が行われたとされている。

こうした経緯から、九十九里平野の集落は、海岸線と平行な旧砂丘列に沿うように列状に分布している。地理学者の菊池利夫氏はこれを第1列（下総台地直下）から第8列（海岸端）までの8つに分類しており（『蓮沼村史』<sup>3)</sup>、迅速測図等で山武市域の古集落を確認しても、曖昧ながら8列程度の分布をみることができる。特に構造が顕著な海岸付近の列構造を詳説すると、次のようになる（以下の「○○」は、一つの親村ごとに共通の地名が入る）。

**岡 集 落** 第5列。中世以来の古集落で、海岸方面への分村の起点になったとされる。平野全域において「○○岡」の小字名をもつ集落が多い。寺院を擁する最も海側の列で、新田・納屋集落の住民は岡集落の寺院を菩提寺にもつ。

**新田集落** 第6列。岡集落や納屋集落の住民による、江戸中期の開拓とされる。旧成東町域以南にのみ顕著に分布し、旧蓮沼村・旧横芝町域では曖昧である。一般的に「○○新田」の小字名をもつが、旧成東町域では「○○ノ下岡」と呼ばれる。

**納屋集落** 第7, 8列。近世に誕生した漁村集落で、長生村から匝瑳市まで集落が連続する。平野南部では「○○納屋」北部では「○○浜」（旧成東町域では「○○ノ下浜」）の小字名をもち、納屋・浜は旧成東町の白幡納屋を境にはっきり分かれる。

このように、特に海岸付近の集落においては、親村・子村が共通の地名を冠するのみならず、寺院をはじめとした文化的・宗教的な結びつきが強く、こうした繋がりが子安講等の習俗にいかんにか反映されているかが注目される。

なお、永田征子氏は、こうした個々の集落（同じ意味で、地元では部落と呼ぶことが多い）を上や南北等で十戸程度に分割した、ニウチ（入地）と呼ばれる最小単位の存在を明らかにしている<sup>4)</sup>。かつては村の行事や交際においてニウチ内での強い結束がみられたが、近年では「ニウチ意識」が希薄となり、ニウチの言葉自体が消滅しつつあるという。

### Ⅲ 山武市における子安講

#### Ⅲ-1 女人講と子安講

地縁による人々の結びつきがきわめて強固だったかつての農村社会では、生活の相互扶助や共同体の維持を目的に、講と呼ばれる地縁集団が数多く組織されていた。講にはさまざまな種類があるが、櫻井徳太郎氏は『講集団成立過程の研究』において、民間信仰によって結ばれた信仰集団である宗教的講、社交や娯楽といった地域の相互扶助を目的とする社会的講、金融・協同労働・労力交換などを目的とする経済的講の3種類に分類している<sup>5)</sup>。

また、『日本民俗大辞典』には、今回の研究対象たる子安講について、「子安神を信仰する講集団。関東地方で盛んである。子安神（子安観音・子安地蔵・子安大明神）は安産・子授け・子育ての神であることから、講の構成員はほとんどが女性である。子供を産み盛りの女性たちの場合が多いが、年配の女性たちで構成されることもある。……（中略）……出産・子育てなどに関する女性たちの情報交換の場や、息抜き・娯楽の意味も持っていた……（以下略）」とある<sup>6)</sup>。すなわち、第一に子安講は、子安神の信仰という宗教的役割をもった、出産年齢以上の女性によって構成される講集団（いわゆる女人講）と考えることができる。さらに、同書に加え、子安講の現存地域で複数の住

民が証言しているように、休暇が少なく女性の立場も低かった上、育児書等の情報媒体も普及していなかったかつての農村社会において、子安講は情報交換と息抜きの場という社会的講の側面も併せ持っていたのである。

### Ⅲ－２ 九十九里平野の子安講

地域によってさまざまな形態をとる女人講であるが、中でも九十九里平野で最も広く分布しているのが子安講である。平野内では、地域による若干の差はあれど、子安講のメンバーによる次のような行事が分布している。

**子安講** 年1回から月1回程度の頻度で行われる子安講の集まり。講員が集まって子安神を拝み、飲食を共にして歓談する。永田征子氏は、東金市・九十九里町周辺で子安講に関する調査を行い、調査当時の時点で子安講の行事が娯楽的側面の強いものになっていたことを明らかにしている<sup>7)</sup>。

**犬供養** 利根川下流域を中心に、南関東から東北南部にかけての地域で行われる、死んだ犬を供養する行事（『日本民俗大辞典』）。関東では、犬はお産が軽い動物であることに肖り、動物供養と安産祈願を兼ねる。小川奉巳氏らは、八千代市睦地区における犬供養の実態を集落ごとに紹介し、女性が妊娠した際、二股に分かれた枝を削り、「ザンマタ」と呼ばれる塔婆を立てる風習を明らかにしている<sup>8)</sup>。この塔婆は女性の股に見立てたもので、地域により「ザガマタ」（『日本民俗大辞典』）など複数の呼称があるという。『千葉県歴史別編民俗1（県史シリーズ34）』（以下、『県史34』と略す）によれば、犬供養は九十九里平野の長生・山武郡域でも行われているというが、二股の犬塔婆については印旛・香取郡域が中心で、「県内では限られた地域にしか伝承がない」（421頁）という<sup>9)</sup>。

**女オビシャ** オビシャは、茨城県南部から千葉県にかけて分布し、弓射の神事を起源とする男性の講行事である<sup>10)</sup>。オビシャは多くの場合1月に実施されるが、九十九里平野では男オビシャの翌日に女オビシャと呼ばれる行事を行う地域がある。旧成東町では、子安神に松竹梅や鶴亀を供える（『成東町の年中行事』）ほか、七里法華地域の東金市では、その年最大の子安講を女ビシャと呼ぶ（『東金市史』<sup>11) 12)</sup>。

**如意輪講** 女性がお産で亡くなった際などに、村外れや川岸などにある如意輪観音を拝む風習。伊藤一男氏は、旧横芝町における如意輪講の様子を紹介している<sup>13)</sup>。

また、上記以外の女人講では、高齢女性による十九夜講や、婦人病の予防を祈願する淡島講などが確認されているが、本研究の対象からは外れるため割愛する。

### Ⅲ－３ 七里法華地域における子安講の実態

2022年6月、平野南部の長生郡長生村で調査を行っていた際、同村本郷地区の住民から「茂原市腰当の子安神社から借りてきた掛軸を、子安講と称して地区の集会場で拝んでいる」という証言を得ることができた。そこで、実際に子安神社を訪問し、神社の役員の男性から次のような内容を伺うことができた。

当地における子安講は安産から子の成長までを祈願するためのもので、集落単位で掛軸を借

りて拝む。周辺地域の子安講がこの子安神社から広まったことは間違いない。講には子供を持ったら参加し、子が成人したら抜ける決まりだが、他の娯楽が多い現代では、新たに入る人は少ない。人が減ったので講を解散したいと相談に来るところも多い。借りている掛軸を子安神社に返してくれれば、講を解散することを認めている。なお、この周辺では石仏は全く立てない。このことから、七里法華の勢力圏下にある子安講がもつ重要な特徴である、

1. 子安講の展開に神社が深く関係していること
2. 掛軸は神社から借りた物であること
3. 信仰に際して石仏を立てないこと

の3点が明らかになる。また、同じく七里法華に属する東金市において、『東金市史』に書かれた子安講に関する記述をみても、この3点は一致する。

なお、役員の方の話によれば、腰当の子安神社の掛軸は、七里法華の外にあたる千葉県全土に分布しているといい、実際に小倉常明氏が千葉市中央区南生実町において「南総腰当神社」と書いた掛軸を発見している<sup>14)</sup>。ただしこの掛軸は、子安講が解散した後に町内の広照寺（真言宗豊山派）に安置したものといい、解散時に掛軸を返却する七里法華地域とは扱いに差があることが示唆される。

### Ⅲ－4 山武市の子安講に関する既存研究

九十九里平野周辺の子安講については、七里法華地域の東金市・九十九里町周辺、ならびに平野の外に当たる利根川方面の女人講に関する既存研究が一定数存在する一方、平野の中央部に位置する山武市域に関していえば、既存の研究にはいくつかの問題点がある。

第一に、これまでの広域的な民俗調査において、山武市域における子安講の存在が認知されてこなかった点である。旧市町村別に作成された子安講の分布図に目を向けると、『県史34』に掲載の分布図には、旧松尾町に子安講の分布を示すのみで、旧松尾町の犬供養、ならびに旧成東町・旧蓮沼村の子安講・犬供養については記載がない。また、『関東地方の民俗地図』千葉県版に掲載の分布図は、県内の広い範囲で子安講の存在を示しているながらも、上記3町村の子安講については一切の記載がない<sup>15)</sup>。こうした民俗地図は、自治体史をはじめとする文献調査や、局所的な現地調査に依存するため、これまで存在が見落とされてきたものと推測される。

第二に、山武市が2006年に誕生した新しい自治体であることから、市内の子安講について統一的な調査を実施した記録が存在せず、旧町村域によって研究状況に大きな差がみられる点である。旧成東町域に関しては、昭和合併前の旧村ごとに地域の習俗をまとめた『成東町の年中行事』があり、子安講に関する紹介もあるが、集落やニウチごとの詳細な調査結果を公表したものではなく、全体の傾向を掴むには至らない。また、成東・松尾・蓮沼のいずれの町村史においても子安講に関する言及は殆どなく、旧松尾町域および旧蓮沼村域における子安講の情報はごく限られている。

第三に、山武市域の子安講に触れた数少ない文献である『成東町の民俗行事』についても、2004年に刊行されたものであるため、現在の実態と乖離している可能性がある点である。また、今回の調査に際して山武市歴史民俗資料館の職員に話を伺ったところ、資料館としても子安講の調査にまでは手が回っておらず、昨今の子安講の実態については市も把握できていないとのことであった。近年の農村社会は、少子高齢化・人口減少に加え、新型コロナウイルスの影響による生活様式の変化に直面しており、子安講の実態に関しても変化があったことが予想できる。

本研究では、上述した既存研究の問題点を解決すべく、山武市平野部の全域において聞き取り調

査を実施した。その方法と成果、ならびに結果をもとにした考察については、次章以降で詳しく紹介する。

## IV 現地調査

### IV-1 調査の目的と方法

Ⅲ-4に挙げた不明点を明らかにすべく、山武市域における子安講についてデータを集めるため、令和5年8月1日から3日までの3日間、現地に泊まり込んで悉皆調査を行った。調査にあたっては、山武市の平野部（今回はJR線より浜側とした）全域を折り畳み自転車で回り、屋外で作業している中高年の住民（男女は問わない）を中心に聞き取りを行った。

調査に先立ち、先行研究をもとに事前に疑問点を整理し、以下の質問を用意した。

1. 子安講を実施しているか。実施していない場合、いつ頃まで実施していたか。
2. 講はどのような単位で構成されるか。また、講員の数と年齢層はどのくらいか。
3. 子安講はいつ、どこで、どのように実施しているか。
4. 子安講の掛軸はあるか。ある場合、どのようなもので、どう管理しているか。
5. 集落で「コヤスサマ」と呼ばれている場所はあるか。
6. 犬供養は実施するか。実施するならいつ、どのように行う（行っていた）か。

調査の際は、1つの大字から最低1集落、可能であれば複数の集落で聞き取りを行い、できるだけ網羅的にデータを収集するよう努めた。ただし、限られた時間の中での調査となったため、上記の質問に全て答えられる住民を見つけられなかった地区も多く、地区によってはデータの詳細性に差が出ている箇所もある。

### IV-2 調査の成果

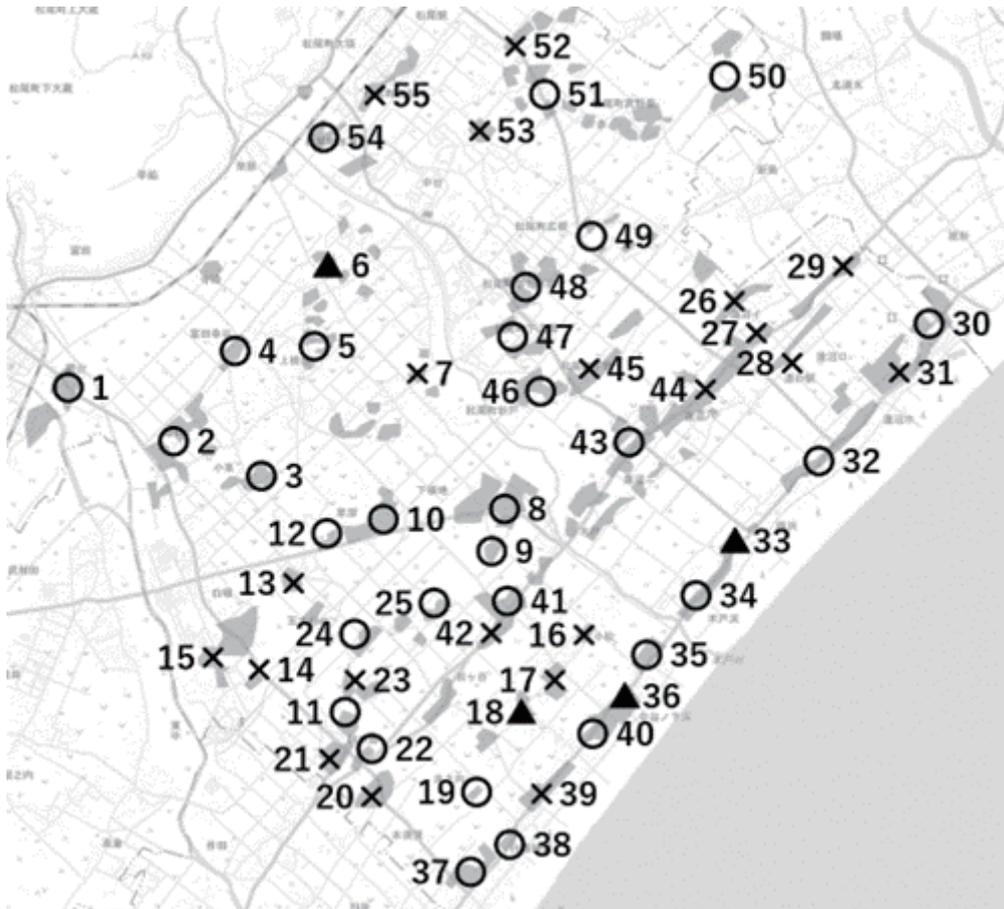
3日間の調査により、山武市平野部の全域にあたる計55ヶ所（旧成東町域34・蓮沼村域10・松尾町域11）の講について情報を集めた。平野部に存在する34の大字のうち、海岸の造成地で人口が極めて少ない蓮沼ホ、ならびに話を聞ける古老が見つからなかった島・下横地・松尾町水深・松尾町五反田を除く、29の大字において1つ以上のデータを収集することができた。

なお、1つの集落が複数の講に分かれるケースもあったため、1つの講を形成する地域について、以降は便宜上「集落」ではなく「地区」という呼称を用いることとする。下に掲げる〔表2〕は、調査を実施した全ての地区について、その成果を一覧にしてまとめたものである。なお、実施方法等のさらに詳しい状況については、本稿の末尾に附表として添付したので、併せて参照されたい。

[表2] 調査結果一覧 (―印は不明または質問未実施を表す)

調査順	[地区名] 大字名 集落名(小区名)	集落(親村) の寺院	[子安講の現況]		[講員構成]		[犬供養]		[掛軸]	[コヤサマ]			
			現況	消滅時期	構成単位	年齢 人数(軒) 存在	タイミング	存在 詳細(保管所)		種類 位置(備考)			
1	殿台	智山派	○現存	--		50代~ 10~20	○有	女性がお産で亡くなった時	○有	--	社 寺院境内		
2	富口	十区	日蓮宗	○現存	大字を2分割(東,西)	40代~	--	○有 春分の日	--	--	--		
3	小泉	--	天台宗	○現存	大字で1つ	40代~	20	○有 2月	○有	絵	石塔 (如意輪観音)		
4	富田幸谷	--	日蓮宗系	○現存	--	高齢	--	--	--	--	社 (鬼子母神)		
5	上横地	上里	天台宗	○現存	--	--	--	○有 正月	--	--	社 寺院境内		
6	〃	原横地(油里)	天台宗	▲中止中	集落を7~8分割 (一部合同実施)	40代~	15	○有 --	○有	絵	--		
7	〃	小柳	智山派	×消滅	約20年前	集落を3分割(上,中,下)	高齢	--	○有	犬がお産で死んだ時	○有	社 寺院境内	
10	草深	草深	智山派	○現存	--	--	--	--	--	--	社 寺院境内		
12	〃	相台	智山派	○現存	--	--	50代~	25	○有 --	○有	絵(当番宅)		
13	五木田	不明	顕本法華宗	×消滅	約4年前	大字を3~4分割	--	--	--	--	神具のみ		
24	〃	橋本	智山/顕法	○現存	--	--	3~4	○有	犬がお産で死んだ時	○有	文字		
11	本須賀	北盛	智山派	○現存	--	--	--	○有 --	○有	文字(当番宅)	--		
22	〃	岡	智山派	○現存	--	--	--	○有 2月11日	○有	絵(当番宅)	--		
20	〃	京塚	智山派	×消滅	約3年前	--	--	8~9	○有	犬がお産で死んだ時	--		
21	〃	前本郷	智山派	×消滅	近年	--	--	--	--	--	--		
37	〃	本須賀納屋	智山派	○現存	--	集落を4分割	中老年	--	--	○有	絵		
14	白幡	新田	智山派	×消滅	約10年前	--	--	--	--	--	--		
15	〃	下荒場	智山派	×消滅	約10年前	--	--	○有	犬がお産で死んだ時	○有	--		
38	〃	白幡納屋	智山派	○現存	--	集落で1つ	70代~	6~7	○有	子安講の後	○有	絵(当番宅)	
19	井之内	六軒家	不明	○現存	--	--	--	○有 --	○有	--	--		
23	松ヶ谷	川代	智山派	×消滅	約20年前	集落で1つ	高齢	--	--	--	--		
25	〃	瓜花	智山派	○現存	--	--	60代~	4	--	--	掛軸なし		
9	〃	北ノ里	智山派	○現存	--	--	高齢	7	--	--	○有	絵 社 共同墓地	
17	〃	宿ノ下岡	智山派	×消滅	約5年前	--	--	--	--	○有	--		
18	〃	関ノ下岡	智山派	▲中止中	--	--	--	--	--	○有	絵(寺)	社 集落内	
39	〃	関ノ下浜(北川岸)	智山派	×消滅	--	集落を3分割(南,中,北)	--	--	--	--	--	社 岡地区内	
41	〃	打出場	天台宗	○現存	--	集落で1つ	70代~	7	○有	犬が死んだ時	○有	絵 子安観音 社 集落境界	
42	〃	中宿	天台宗	×消滅	--	--	--	--	--	○有	--(寺)	--	
36	〃	中谷ノ下浜(北)	天台宗	▲中止中	--	集落を2分割(北,南)	--	--	--	○有	絵	--	
40	〃	中谷ノ下浜(南)	天台宗	○現存	--	--	60代~	10弱	○有	春秋彼岸・犬がお産で死んだ時	--	--	
8	小松	小松岡	天台宗	▲中止中	--	大字を4班に分割	50代~	5~6	○有	年2回	○有	文字(当番宅) 社 寺院境内	
35	〃	小松浜	天台宗	○現存	--	集落を2分割(南,北) していたが近年合す	--	--	○有	女性がお産で亡くなった時	○有	絵	
16	〃	中谷ノ下岡	天台宗	×消滅	--	--	4~5	○有	女性に子供ができた時	○有	絵	社 神社境内	
34	木戸	木戸浜	天台宗	○現存	--	--	70代	5	--	--	○有	絵	
26	蓮沼イ	上谷(上)	浄土宗	×消滅	不明	集落を2分割(上,下)	--	--	--	--	--	--	
27	〃	上谷(下)	浄土宗	×消滅	約40年前	--	40代~	--	--	--	--	社 (現在喪失)	
28	〃	十二区	浄土宗	×消滅	約10年前	集落を2分割	--	--	○有	犬が死んだ時	○有	文字(公民館)	
29	〃	川面	浄土宗	×消滅	数年前	--	--	--	--	--	--	--	
30	蓮沼口	川下	浄土宗	○現存	--	集落を3分割(上,下,芝)	50代~	13	○有	女性or犬がお産で亡くなった時	○有	絵(当番宅) 社 2箇所	
31	〃	殿下	浄土宗	×消滅	数十年前	--	--	--	--	--	--	--	
44	蓮沼ハ	西岡	浄土宗	×消滅	約5年前	集落を2区に分割	--	--	--	--	○有	3本全て絵	
43	蓮沼ニ	九区	浄土宗	○現存	--	集落を4里に分割	60代~	4	--	--	○有	3本絵&文字	
32	〃	西浜	浄土宗	○現存	--	--	15~16	--	--	--	○有	文字	存在はする
33	蓮沼平	平	浄土宗	▲中止中	--	大字で1つ	--	--	--	--	○有	絵	
54	本水深	--	天台宗	○現存	--	--	--	--	--	--	○有	--	
55	祝田	--	不明	×消滅	約20年前	--	--	--	--	--	--	--	
53	高富	--	天台宗	×消滅	数十年前	大字を多数に分割	--	--	--	--	○有	複数	
52	本柏	--	天台宗	×消滅	数十年前	大字を5里に分割	--	--	--	--	○有	絵	社 社
51	木刀	--	日蓮宗	○現存	--	大字で1つ	--	--	--	--	○有	文字	
50	武野里	中里	単立	○現存	--	集落で1つ	--	--	--	--	○有	絵(当番宅)	
48	借毛本郷	--	天台宗	○現存	--	大字を複数に分割	--	--	○有	犬がお産で死んだ時	○有	絵	
47	下之郷	--	顕本法華宗	○現存	--	大字で1つ	50代~	--	○有	子安講と同時に	○有	絵 鬼子母神 社	
45	下野	--	不明	×消滅	数十年前	--	--	--	--	--	--	--	
46	折戸	--	日蓮/天台	○現存	--	大字を4分割	--	--	○有	犬がお産で死んだ時	○有	絵(青年館) 社 寺院境内	
49	広根	--	顕本法華宗	○現存	--	--	--	--	--	--	○有	絵	

また、下に掲げる [図2] は、情報を得られた55地区の位置関係と、子安講の実施状況 (○=現存, ×=消滅, ▲=新型コロナウイルスの影響により中止中) を地図上に示したものである。



〔図2〕子安講の実施状況

(背景の地図は、地理院地図の上に、筆者が明治期の集落の位置を重ねたもの)

次章では、〔表2〕〔図2〕および附表に示した調査結果を、考察を交えながら分析する。

## V 調査結果の分析と考察

### V-1 子安講の現存状況

今回調査結果の得られた55地区は、いずれも明治以前から存在した古い集落であるが、全ての地区で講を「実施している」または「実施していた」という回答であり、「分からない」と答える人はあっても、「実施したことがない」という回答はなく、先述した民俗地図の記載に反し、ほぼ全ての地域に子安講が分布していたことが明らかとなった。一方、戦後に開発された分譲地については、時間の関係で殆ど調査ができなかったものの、島地区・白幡地区の2ヶ所の分譲地で、「ここは新興住宅地であるから、子安講のような組織については分からない」といった趣旨の話を聞いたため、古い農村集落と分譲地の間では多少なりとも文化的な分断が生じているものと推測できる。

続いて、結果の得られた55地区について、その現存状況を地域別にまとめたのが、下に掲げる〔表3〕である。

[表3] 子安講の現存状況

旧町村域	成東町	蓮沼村	松尾町	合計
現存	19	3	7	29 (52.7%)
消滅	11	6	4	21 (38.2%)
中止中	4	1	0	5 (9.1%)
調査数計	34	10	11	55

なお、消滅との回答があった地区で詳しく尋ねてみると、数年前～約10年前に消滅した地区が9地区（全体の16.4%）、約20年前～数十年前に消滅した地区が8地区（14.5%）、消滅の時期が分からなかった地区が4地区（7.3%）であった。また、コロナ禍の影響で中止中との回答があった地区（5地区。飲食を中止して仏事のみ行っている地区は含めない）の中には、復活の見込みがあるという地区・ないという地区の両方が存在した。

以上の結果から、山武市平野部における子安講は現在も過半数の地区で現存していることが明らかとなった。一方、中止中の地区や近年消滅した地区の数を加えると、約10年前までは43地区（78.2%）、すなわち8割に近い数の地区で講が現存していた計算となる。当地においては直ちに市全体で講が消滅に至るような兆候はみられないものの、地区単位では着実に消滅が相次いでおり、コロナ禍による今後の影響も含めて注視が必要であると考えられる。

## V-2 講集団の構成単位

講の構成単位については29地区（52.3%）で情報が得られた。単位が最も大きいのは、1つの大字で1つの講を構成する地区で、小泉（97世帯）・蓮沼平（39）・松尾町木刀（111）・松尾町下之郷（38）など、比較的小規模な大字が多く（平野部にある34の大字の平均世帯数は231世帯。なお、以上の世帯数は全て2015年国勢調査による）、集落で1つの講を作る地区がこれに続く。また、永田氏が言及していたとおり、集落を2～3分割した講単位を持つところも多く、中には4分割（蓮沼ニの九区）・7～8分割（上横地の原横地）する地区もあった。この小単位には、里（九区など）・区（蓮沼ハの西岡など）・班（原横地など）など集落ごとに複数の呼び方があるが、永田氏が指摘した「ニウチ」の語が用いられている事例は確認できなかったため、ニウチは既に死語となっている可能性がある。

その他の興味深い事例では、講員の増加により昭和40年代に集落を2分割した事例（松ヶ谷の中谷ノ下浜）や、現在は複数の班が合同で講を行っている事例（原横地）などがあり、構成単位は時代により一定の流動性があることが示唆される。

このように、子安講は地区ごとに異なる複雑な構成単位をもつことが明らかとなった。ゆえに今回の調査に関しても、存在する全ての講を把握するのは困難であり、平野部における子安講の全貌を完全に明らかにするには至っていないと考えられる。

## V-3 講員の構成

既存の文献にもある通り、当地における子安講に関しても、各世帯から1人ずつ講員を出すことが不文律となっていた地区が多いようである。参加・離脱のタイミングには地区により若干の差異があり、「嫁入り時に入り、姑になると抜ける」（小泉）、「子を授かると参加する」（松尾町下之郷）、「娘が入ると抜けていた」（白幡の白幡納屋）、「親が抜けないと子が入れない」（富口の十区）といっ

た証言が聞かれた。また、「以前は嫁に来れば必ず入るべきものとされたが、近年では選択の自由がある」（白幡納屋）地区が多いようで、若い人が参加せず、講員の減少や高齢化が進んでいるという声も多く聞かれた。

講が現存している、あるいはコロナ禍で講行事を中止している34地区のうち、講員数については15地区（44.1%）、年齢については17地区（50.0%）で情報を得ることができた。この結果をまとめたものが、下に掲げる〔表4〕および〔表5〕である。

〔表4〕 講員数		〔表5〕 講員の最小年齢	
5人以下	6地区	40代	4地区
6～10人	3地区	50代	5地区
11～20人	5地区	60代	3地区
21人以上	1地区	70代	3地区
		高齢／中高年	5地区

詳しい年齢は分からないが、全員が高齢者（中高年）である、という回答

講員数については、最少の地区で3～4人、最大の地区で25人という回答が得られた。往時の2分の1、あるいは3分の1以下になった地区も多いようで、15地区のうち9地区が講員10人以下、6地区が5人以下という回答だった。また、講員の年齢については、30代以下の講員がいる地区は皆無で、全ての地区で中高年者が講の全員を占めていることが確認できた。

以上のことから、山武市平野部における子安講は、大半の地区で講員の減少と高齢化が顕著に進んでいることが明らかとなった。このことから、かつての子安講が持っていた「安産や子育ての安全祈願」「子育てに関する情報共有」といった意義は既に多くの地区で失われており、講の役割が中高年の女性の社交の場に変わっていることが推測できる。

#### V-4 子安講の実施方法

子安講の実施方法についても、地区によって少しずつ差異がみられた。

はじめに、講の実施回数については、毎月の実施を守っている地区（松ヶ谷の瓜花など）から、1月・5月・9月の年3回（地元ではこれをショウゴク（正五九）と呼ぶ）に実施する地区、1月のみ実施する地区など、様々な形態がみられた。また、毎月だった講を年3回に、あるいは年3回だった講を年1回に減らした地区も多くみられ、時代の変化とともに講行事の頻度が徐々に減少していることが推測できる。

以前行われていた子安講の姿について尋ねると、当番の家に掛軸を立てて仏事を行ったのち、当番が用意した、あるいは各講員が持ち寄った飲食物を食べるという流れが多かった。子安講の当番は順番に回ってくるもので、五木田・原横地・小松の小松岡などでは「オトウバン」と呼ばれていた。しかしながら、近年は当番宅で仏事を行う地区は少数派であり、昭和期以降に地区の公民館等に場所を移したという地区が多かった。また、仏事後の食事については17地区で情報を得られたが、現在はその全ての地区で外食に切り替わっており、当番宅や公民館で食事をする例はみられなかった。なお、食事場所の手配を当番が行う地区（原横地）に加え、中には初めから飲食店に子安講の掛軸を持参して仏事を行う地区（松ヶ谷の打出場・蓮沼イの十二区など）もあり、地域の飲食

店が子安講と強く結びついていることが窺えた。

さらに具体的な方法に目を向けると、賽銭を集めて社の修繕費に充てる地区（打出場）、一度集めて2月の子安講で返す地区（蓮沼口の川下）、寺で団子を作って持ってきていた地区（本須賀の京塚）、「コヤサズケタマエ……」という歌が紙に書かれており、皆で読み上げる地区（松ヶ谷の北ノ里）、講師や嫁へ行った娘が身籠ると皆で呼んでご馳走を振る舞った地区（草深の相台）、小学生の子供を講に連れて来て遊ばせていた地区（小松の小松浜）など、地区によって独自の慣習がみられた。さらに、近年では子安講と女オビシヤの行事を混ぜて行っている地区（本須賀の北盛および岡）も確認できた。

これらを菩提寺の宗派と関連づけて比較すると、天台宗・真言宗・浄土宗の3宗派では、講の実施方法に明確な有意差はみられなかった。一方、日蓮宗・顕本法華宗の寺院が分布する地区は、信仰対象となる子安神が子安観音ではなく鬼子母神になっていたり（富口の十区・富田幸谷・松尾町下之郷）、1月8日に行われる最も大きな子安講をオビシヤと呼んだり（松尾町下之郷）、掛軸を立てずに東金神社から借りた神具のみを用い、特殊なつゆを作って回し飲んでいたり（五木田）と、明らかに他地域とは異なる慣習が確認できた。すなわち、七里法華の影響力が薄れる山武市域においても、日蓮宗の勢力下にある地区では、東金方面に近い方法で、独自の形式の子安講を実施していることが明らかとなった。

#### V-5 掛軸とその取扱い

掛軸については32地区（58.2%）で情報を得られた。このうち、絵が描かれたタイプが22地区、文字が書かれたタイプが6地区、掛軸を用いない事例が2地区で、数の上では絵が優勢を占めているものの、絵・文字の両者が混在することが分かった。なお、掛軸の種類について、菩提寺の宗派間で有意差はみられなかった。また、旧蓮沼村内で隣接している西岡と九区では、掛軸を3本用いる事例が確認できたほか、松尾町高富でも複数の掛軸を用いるという証言が聞かれた。掛軸を複数用いる事例については、十分な調査ができなかったため、今後の研究が待たれるところである。

掛軸の保管については12地区で情報を得られたが、殆どの場合、講が現存する地区では当番宅、消滅した地区については寺院や公民館で保管しているようである。山武市域にある掛軸は借りた場所が分からないものが多いようで、消滅後も返さずに地域で保管しているとのことであった。一方、日蓮宗・顕本法華宗の勢力下にある地域では、Ⅲ-3で示した事例と同様、「講を解散する際には掛軸を返す」（松尾町広根）という証言が聞かれ、掛軸の扱いについても、日蓮宗系とその他の宗派で差がみられることが確認できた。

#### V-6 コヤスサマとニヨイリンサマ

地域で「コヤスサマ」と呼ばれている場所については、17地区（30.9%）で存在が確認できた。このうち大半が図3のような小社で、集落内や寺院の境内に設置されている例が多く、子安講の仏事の後で拝む地区（五木田の橋本など）もあった。例外としては、小泉にある如意輪観音の石柱（平成24年造立）がコヤスサマと呼ばれている事例があったが、その由来は不明である。

加えて、集落の境などに、図4に示したような如意輪観



【図3】北ノ里 共同墓地のコヤスサマ

音の刻像塔が置かれている事例が、少なくとも10集落で確認できた。この如意輪観音はニオイリンサマ、ニョウレンサマ（小松浜など）、カンノンサマ（川下など）などと呼ばれており、妊婦や子供が亡くなった際に参拝するという地区も複数（白幡納屋・瓜花・打出場など）あった。この慣習はニョウレン参り（瓜花）やカンノン参り（打出場）などと呼ばれており、伊藤氏が報告した如意輪講と同様の習俗と考えられる。このように、集落にあるコヤスサマ・ニオイリンサマが、現在も子安講・子安信仰と密接に結びついていることが明らかとなった。

また、岡－浜（納屋）の関係をもつ集落については、浜にあるコヤスサマ・ニオイリンサマに詣でる地区（小松の中谷ノ下岡）、新田や浜を含む全員が岡のコヤスサマに詣でに来る地区（小松岡）、「浜の子安講は岡と比べて料理が派手な地域が多かった」という証言（川下ほか複数地区）等がみられ、子安講における岡－浜の繋がりや差異を一定程度確認できた。



【図4】如意輪観音（明治28年銘）  
蓮沼イの川面地区にて

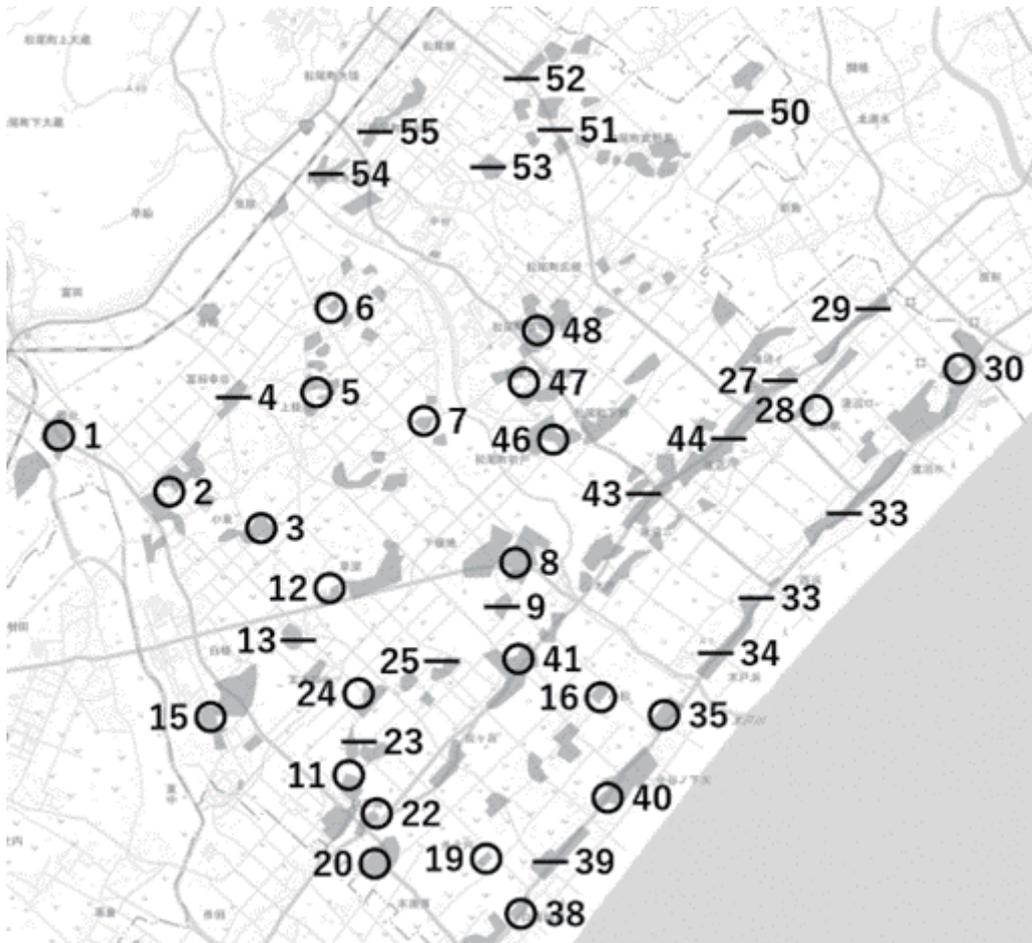
#### V-7 犬供養の実施形態

犬供養については、43地区（78.2%）で情報を得ることができた。この結果をまとめたものが、下に掲げる〔表6〕である。

〔表6〕犬供養の有無

行っている（または行っていた）	24	(55.8%)
┆ 正月,彼岸など決まった時期	8	> 1地区重複あり
┆ 犬がお産で死んだ時	8	> 1地区重複あり
┆ 女性がお産で亡くなった時	3	> 1地区重複あり
┆ 女性に子供ができた時	1	
┆ 犬が死んだ時	1	
┆ 不明	3	
以前から行わない（聞いたことがない）	19	(44.2%)

また、下に掲げる〔図5〕は、43地区の位置関係と、犬供養の有無（○=あり, — =なし。必ずしも現在の実施状況を示すものではない）を地図上に示したものである。



【図5】犬供養の有無

(背景の地図は、地理院地図の上に、筆者が明治期の集落の位置を重ねたもの)

当地の犬供養のうち最も多い事例は決まった時期に講を行うもので、その実施日は正月（上横地の上里）・2月（小泉）・春分の日（十区・本須賀岡）・子安講と同日（白幡納屋・松尾町下之郷）など、地区により様々であった。犬がお産で死んだ時（本来お産が軽いとされる犬がお産で死ぬことは、縁起が悪いとして忌むという）が同数で、女性がお産で亡くなった時がこれに続く。なお、後者2例に該当する地区については、医療技術の向上や野犬の減少などで、近年は殆ど実施されておらず、決まった時期に行う地区のみが、犬供養の伝統を辛うじて維持しているのが現状である。

また、【図5】が示す通り、犬供養が伝わる地区は、南西側（一宮方）が比較的多く、北東側（旭方）が比較的少ない傾向にあることが分かった。その他には、岡－浜関係をもつ海岸沿いの集落に注目すると、海岸線と垂直の方向である程度実施有無にまとまりがみられたが、特に松ヶ谷周辺の情報十分に集まらなかったため、これが岡－浜関係と相関をもつか否か、追加の調査が必要である。

一方、犬供養の形態については、川岸で供養する地区（殿台・上



【図6】如意輪観音像の裏手に今年（令和5年）供えられた犬塔婆。十区にて

横地の小柳)、卒塔婆を川に流す地区(松尾町折戸)、村境の石仏を拜む地区(十区・打出場)、海岸に小山を築いて供物をするが、卒塔婆は立てない地区(白幡納屋)など、地区の地勢によって様々な習俗が確認できたほか、成東の波切不動尊に参拝する地区(中谷ノ下浜)、金を出し合って茶菓子を買い、集まって茶を飲んで供養するだけだった地区(白幡の下荒場)もあった。なお、当地で用いられる卒塔婆は通常の板状のもので、利根川下流域を中心にみられる「ザンマタ」の類はみられなかった。

#### V-8 中谷ノ下浜 南地区の子安講

V-3において、講員の高齢化とともに、子安講の趣旨が変わりつつあることを明らかにした。ところで、後継者が不足して消滅する講も増える中、特に着目したい事例が、松ヶ谷の中谷ノ下浜集落にある南地区の子安講である。

南地区の子安講は、講員の負担が重くなりすぎないように、毎年内容を見直して取捨選択を行っているのが特徴である。例えば、かつては正月に女オビシャを実施し、子安講と同じ掛軸に供物を供えていたが、負担が重いため取り止めている。南地区では、こうした動きを「改良」「開拓」と称し、講を少しでも存続させるための肯定的なものとして捉えているという。一方、伝統の消滅を防ぐため、長年毎回の実施形態を記録し続けている講員がおり、記録を参考にしながら講の流れを決めることもあるとのことであった。

地元の方は、「先輩が大切に守ってくれた大切なものであるから、若い人に引き継いでもらいたい」と思っている。講がなければ地域で顔を合わせる機会がないため、人との繋がりを作るものとして最も大事にしている。コロナ禍で講をやらないことに慣れ、面倒になるのが気がかりであると仰っていた。講員は以前より減少し、年齢層も60代以上となっているそうであるが、当地では「珍しいくらい後継ぎが入る」とのことで、地域に住む中高年層の女性が顔を合わせる貴重な機会として、子安講が社会的講として地域コミュニティにおける役割を保っていることが窺えた。

南地区の子安講は、少子高齢化が進む今後の農村地域において、伝統的講の在り方を考える貴重な事例の一つといえよう。

## VI おわりに

本研究では、これまで明らかにされていなかった、山武市平野部における子安講の実態について、現地調査の成果を中心に報告した。

結果として、既存研究では情報が断片的だった旧松尾町域・旧蓮沼村域を含め、山武市平野部にあるほぼ全ての農村集落において子安講が伝承され、その過半数が現存していることが明らかとなった。また、子安講とそれに付随した犬供養の形態は、講の構成・実施方法・現状の全てにおいて、実に多様な様相を呈することが認められた。こうした形態の違いは、講の伝播の過程や、集落が抱える地理的特性に加え、農村社会の変化に伴う簡略化の過程により、地区ごとに差異が生じていったものと推測される。

II章で述べた通り、本研究で扱った山武市は、九十九里平野の地理的・文化的中央部に位置づけられる。子安講に関しても、日蓮宗系の宗派の影響圏には明確な特性がみられ、七里法華地域の講文化が当地に流入していることが確認できた。一方、天台宗と真言宗、ならびに山武市特有の宗派である浄土宗の3宗派については、各影響地域の間で明確な形態の差異は認められなかった。この

点を明らかにするには、さらに綿密な調査が待たれるところである。

山武市域における子安講は、全域での消滅が迫る危機的状況には至っていないが、講の数そのものは着実に減少している状況である。その原因には、娯楽や情報媒体の普及、少子高齢化の進展、最近では新型コロナウイルスの感染拡大など、近年の農村社会に訪れた変化により、子安講の宗教的・社会的意義が失われつつあることが大きい。山武市域においては特に講員の高齢化が進行しており、「安産や子育ての祈願」「子育てに関する情報共有」といった本来の子安講の役割が、既に殆どの地区で失われていた。このように形を変えつつある子安講であるが、V章で紹介した中谷ノ下浜南地区を筆頭に、地域の中高年の女性たちが定期的に顔を合わせて外食を楽しむ機会として、子安神の信仰という名目を維持しながら、現在も農村社会のコミュニティの中で広く受容されていることも明らかとなった。こうした子安講の実態は、伝統的な講集団の多様性を示す民俗学的な重要性に留まらず、現代の農村社会における民間信仰と地域コミュニティとの結びつき、あるいは現代社会の変化に沿った信仰の変遷を知る上で、きわめて貴重な事例といえよう。

一方、本研究では山武市平野部における悉皆調査を試みたものの、時間の制約、ならびに複雑な構成単位をもつ当地の子安講の特性により、現地にある全ての子安講の実態を詳細に把握することはできなかった。無数に存在する講の全てを調べるのは困難な仕事であるが、本研究で明らかにした子安講の学術的価値を踏まえ、今後さらに詳細で網羅的かつ広域的な研究を実施したい。

## Ⅶ 参考文献

1. 千葉県ホームページ「宗教法人名簿」(2023-09-18参照)  
<https://www.pref.chiba.lg.jp/gakuji/shuukyuu/houjin/houjinmeibo.html>
2. 『千葉県の地名』日本歴史地名大系第12巻(平凡社、1992年)
3. 蓮沼村史編纂委員会編『蓮沼村史』(蓮沼村、1992年)
4. 永田征子「九十九里平野に存するニウチの変貌について」(井之口章次編『日本民俗学フィールドからの照射』、雄山閣出版、1993年)
5. 櫻井徳太郎『講集団成立過程の研究』(吉川弘文館、1962年)
6. 福田アジオ編『日本民俗大辞典 上』(吉川弘文館、1999年)
7. 永田征子「東金市周辺における子安信仰」(千葉県企画部県民課編『千葉県の歴史』4号、千葉県、1972年)
8. 小川奉巳、上原美津江、早瀬黄己「子安講と犬供養」(『よなもと今昔』11号、阿蘇郷土研究サークル、1994年)
9. 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 別編民俗1(県史シリーズ34)』(千葉県、1999年)
10. 6と同一
11. 成東町歴史民俗資料館編『成東町の年中行事』(成東町、2004年)
12. 東金市『東金市史 5 総集編』(東金市、1987年)
13. 伊藤和男「如意輪講 野辺の石仏に縁うすい女偲ぶ子安講の人びと」(『農業千葉』1992年7月号、千葉県農業改良協会、1992年)
14. 小倉常明「子安講と南総腰当神社 初代千葉県令柴原和の一育児事業の中間報告」(『千葉県社会事業史研究』25号、千葉県社会事業史研究会、1997年)
15. 天野武監修『関東地方の民俗地図』(都道府県別日本の民俗分布地図集成第4巻、東洋書林、1999年)

## 附表・取材成果一覧

### 凡例

<寺院の宗派>

天…天台宗 智…真言宗智山派 日…日蓮宗 顕…顕本法華宗 浄…浄土宗  
 単…単立 ?…不明

<講の現況>

○…現存 ×…断絶 ▲…コロナ禍により中止中

<犬供養の有無>

○…あり -…なし (習俗が伝わっているかを表すもので、現況とは一致しない)

なお、地区は旧成東町・蓮沼村・松尾町の順に並べてある

### [附表A] 子安講の実施形態

調査順	大字名	集落名 (小区名)	寺院	現況	子安講の実施形態
1	殿台	-	智	○	公民館で掛軸を拜んでから食事をする。昔は当番制で作っていたが現在は外食する
2	富口	十区	日	○	公民館で十区(公民館より東)と十一区(西)に分かれて実施。女性3人に聞いたが内容は釈然とせず、「やっていないかも」という人も
3	小泉	-	天	○	大字で1つの講。1月後半頃、菩提寺の住職に来て拜んでもらう。食事は現在外食する。女オビシヤと同時に実施
4	富田幸谷	-	系	○	青年館に集まって拜む。やっちはいるが、終わりが近いと思う
5	上横地	上里	天	○	3ヶ月に1度。「我が家は入っていないのでよく分からない」とのこと
6	〃	原横地 (油里)	天	▲	原横地の中で7~8班に分かれる。油里の班は高曽根と合同で実施。年4回だがコロナで中止中。以前は公民館で食事していたが、現在は仏事のみ行い、以降は外食する。昔は赤飯や天ぷらなどを持ち寄って食べていた。日程決めや外食の場所取りは現在もオトウバンが行う
7	〃	小柳	智	×	20年ほど前に消滅。上中下の3班に分かれて実施。現在はいずれの班も活動していない。
10	草深	草深	智	○	
12	〃	相台	智	○	1月第3週頃。集会所に集まって掛軸を拜んだ後、相台の西境と草深にある2箇所の新ヨイリンサマを拜む。以前は講員が身籠ると皆で呼んでご馳走を振る舞った。他所へ嫁に行った娘が身籠ると呼び戻して祝ったが、息子が婿入りした先で子を設けても祝わなかった
13	五木田	不明	顕	×	3~4年前に消滅(コロナとは無関係)。大字を3~4つに分けて実施。1月と夏の2回だった。同じ器で酒を回し飲む、つゆを飲む、成東の波切不動尊に参拝する、共同で飲食する、等の行事を実施していた。つゆは具を丸く切り出す決まりがあった。食事は、昔はオトウバンが作っていたが、近年は外食していた。五木田の他の地区も同じ方式だと思う。講が解散する際、神具は東金神社に返した
24	〃	橋本	智 顕	○	以前は月1回だったが、現在は頻度を減らしている。掛軸を拜み、コヤスサマに参拝する
11	本須賀	北盛	智	○	1月5月9月だったが、1月24日。集会所に掛軸を飾り、米と金を供える。金は200円/人。掛軸の下には、半紙で折った鶴と聖護院大根で作った亀を飾る(本来はオビシヤの慣習であるが、子安講と同時にを行うようになった)
22	〃	岡	智	○	1月24日。コロナで中止していたが、今年は仏事のみ再開、来年から飲食の再開が決まっている。寺に幟を立て、札と団子を用意して拜み、共同で飲食する。現在は外食。女オビシヤと併せて実施。掛軸の所有は当番制で、これを回子安講と呼ぶ。掛軸のことをコヤスサマと呼ぶ
20	〃	京塚	智	×	2~3年前に消滅。当番の家に集まって拜み、食事に行っていた。寺で団子を作って持ってきていた。掛軸は当番宅で保管していた。

21	〃	前本郷	智	×	近年消滅（岡地区の住民情報）。年2回くらいだと思う。この地域ではお茶講は実施しない
37	〃	本須賀納屋	智	○	4つに分かれて実施
14	白幡	新田	智	×	10年ほど前に消滅
15	〃	下荒場	智	×	10年ほど前に消滅
38	〃	白幡納屋	智	○	集落で1つの講。昔は年3回行っていたが、現在は年1回実施。当番宅に集まり拝んだのち、飲食を行う。現在は外食、講員以外とも共に食事する。子安講の他に十九夜講も存在した
19	井之内	六軒家	?	○	年数回。詳細は分からない。高齢の女性は念仏講に入り、彼岸に行事を行う
23	松ヶ谷	川代	智	×	20年ほど前に消滅。集落で1つの講。当時を知る人がいないので詳細は不明
25	〃	瓜花	智	○	毎月。以前は当番の家の座敷で行っていたが、コロナにより、現在は集落の出荷場で仏事を行うのみ。この他にジュウクヤサマがあり、絵の描かれた掛軸を当番宅で保管。コロナにより、現在は近隣に菓子配るのみ。「コササズケタマエ……」という歌が紙に書かれており、皆で読み上げる。講員は4人
9	〃	北ノ里	智	○	1月5月9月だがコロナで飲食を中止中、仏事のみ。コヤササマに集まり、掛軸を前に掛けて拝む。神酒を飲み、赤飯を食べ、その後食事に行く。現在は外食する。蓮沼の浪川荘などをよく利用していた。
17	〃	宿ノ下岡	智	×	5年ほど前に消滅
18	〃	関ノ下岡	智	▲	コロナで中止中、復活するか分からない
39	〃	関ノ下浜（北川岸）	智	×	40年前以降に消滅。南北中の3つに分かれて実施していた
41	〃	打出場	天	○	打出場、中宿、新田の各字ごとに実施。毎月だったが、今年にはコロナにより1月8日の初子安講のみ実施。再開の見込みはある。その他、お産があると臨時で集まることもあったが、近年は少ない。以前は当番宅で行っていたが、近年は地区の食堂に掛軸を持参し、賽銭を供えて飲食をする。この賽銭は積立ててコヤササマの修繕に充てる。3月15日に子安講のメンバーで集まって梅若十五日を行い、掛軸の前に蠟燭を立てて賽銭をあげる。お産が軽く済むという意味で、短い蠟燭を用いる。その他、1月24日にオビシヤを行う。お膳を作り、松竹梅・鶴亀・米一升・大根・人参などを供え、ボン菓子（現在はポップコーンで代用）を撒きながら歌を歌う。以前は、大根と人参をそれぞれ男女の性器の形に切っていた。鶴亀の亀は当番の家により、紙や木の根など様々。21日に3里合同で男オビシヤがあり、ここで残った神酒を飲むが、男性の精液を頂くという意味かと思う。男オビシヤには神主、女オビシヤにはゴゼンサマ=住職が拝みに来る。以前は3月3日にオヒナサマを実施していたが、現在は行わない
42	〃	中宿	天	×	高齢化で近年消滅
36	〃	中谷ノ下浜（北）	天	▲	集落で南北の2つに分かれて実施。昭和46、7年頃まで同一の講だったが、人数の増加により分けた。昔は毎年実施していたが、現在は年3回だがコロナで中止中
40	〃	中谷ノ下浜（南）	天	○	以前は毎月行っていたが、昭和40年頃より1月5月9月に実施。幡を立て、掛軸の下に神酒・赤飯などの供物・賽銭100円を供え、飲食する。昔は当番宅で作っていたが、若い人にとっては負担になるので、近年は外食。この際に用意する供物はオハンセンと呼ぶ。「お飯銭」の意と思われるが特に漢字は当てない。かつては2月19日にニョイレンサマという行事があり、内容は子安講と同じだった。現在は実施しない。講が少しでも続くように、毎回『改良』『開拓』を行っており、毎回の実施形態を長年記録し続けている人がいる。その他の風習としては、オビシヤ……正月に実施。コヤササマと同じ掛軸に、松竹梅・ポップコーン・鶴亀（亀は木の根）などを供えていたが、数年前『開拓』したジュウクヤサマ……子安講を抜けた高齢者の講。現在は消滅。先輩が大切に守ってくれた大切なものであるから、若い人に引き継いでもらいたいと思っている。講がなければ地域で顔を合わせる機会がないため、人との繋がりを作るものとして最も大事にしている。コロナで講をやらないことに慣れ、面倒になるのが気がかり。なお、当地では寺の住職のことをゴゼンサンと呼ぶ
16	小松	中谷ノ下岡	天	×	年1回だったがコロナで中止中、復活しないと思う。以前は当番の家で実施していたが、昭和50年頃から公民館で実施となった

8	〃	小松岡	天	▲	飲食や掛軸の所有は集落別。1月だがコロナで中止中。村内全集落の人がコヤササマに参拝する（小松浜の人は札だけもらって帰る）。以前は公民館で食事していたが、現在は外食する。小松は4班に分かれているため、掛軸も4本ある。オトウバン宅で保管
35	〃	小松浜	天	○	南北で2つに分かれて実施していたが、近年合した。掛軸を拝み、飲食する。現在は外食。以前は月1回実施しており、子供（小学生以下）と一緒に連れていき、脇で遊ばせていた
34	木戸	木戸浜	天	○	以前は1月、5月、9月に実施。掛軸を拝み、飲食する。現在は弁当を買って食べたり、外食したりする。彼岸日に浪切不動尊に参拝する
26	蓮沼イ	上谷 (上)	浄	×	消滅、時期不明。上下の2つに分かれて実施
27	〃	上谷 (下)	浄	×	30~40年ほど前に消滅。『楽しみ会のようなもの』
28	〃	十二区	浄	×	10年ほど前に消滅。2つに分かれて実施。以前は毎月実施していたが、のちに年2回となった。1月3週の日曜には、外食先に掛軸を持って行き、形だけ拝んでから食事をした。浪川荘などをよく利用した
29	〃	川面	浄	×	数年前に消滅、コロナとは無関係
30	蓮沼口	川下	浄	○	上下と芝の3つに分かれて実施。毎月実施していたが、今年から1月、5月、9月実施に変更。当番の家に集まり、掛軸の前に講員全員分のお茶を並べ、ロウソクを立て、順に手を合わせて200円の賽銭をあげる。この賽銭は一旦集めて2月の初子安講で返す。以前は当番の家で作って出していたが、現在は外食する。魚民商店などをよく利用する。コロナにより、現在は当番の家が単独で拝むのみ。浜の子安講は岡と比べて料理が派手な地域が多かった。 子安講の他に、毎月ジュウクヤサマがある。子安講とは別の掛軸を用い、当番宅で保管する。決まった歌があるので、当番宅に集まって歌い、食事を行う。コロナにより、現在は当番宅が単独で拝むのみ。コロナが明けても復活はしないと思う
31	〃	殿下	浄	×	数十年前に消滅
44	蓮沼ハ	西岡	浄	×	4~5年ほど前に消滅。道の南北で2区に分かれて実施していた
43	蓮沼ニ	九区	浄	○	集落内で4里に分かれて実施。コロナで中止中、掛軸も止まっている。当番宅に3本の掛軸を全て立てて拝み、飲食する。現在は外食
32	〃	西浜	浄	○	掛軸を拝み、食事をする。子安講と別にジュウクヤサマも行う
33	蓮沼平	平	浄	▲	大字で1つの講。コロナで中止中だが、復活すると思う。掛軸を拝む。子安講と別にジュウクヤサマも行っていたが、消滅した
54	本水深	-	天	○	年1~2回実施。掛軸を拝む
55	祝田	-	?	×	20年ほど前に消滅
53	高富	-	天	×	10年以上前に消滅。東・西ほか多数に分かれて実施していた
52	本柏	-	天	×	10年以上前に消滅。5つの里に分かれて実施していた
51	木刀	-	日	○	大字で1つの講。掛軸に賽銭をあげて拝み、歓談する。食事は当番が赤飯などを作っていたが、現在は外食する。歌は歌わない。昔の農家は土日もなく働いていたので、子安講が楽しみだった
50	武野里	中里	単	○	集落（約40軒）で1つの講。掛軸を出して歌を歌い拝む。コロナ前から集まって講を行わなくなり、地区の役員で掛軸を回すのみ
48	借毛本郷	-	天	○	大字を複数に分けて実施。年に3~4回実施する
47	下之郷	-	顕	○	大字で1つの講。1月8日、5月9日、12月に実施しているが、現在はコロナにより1月のみ。1月8日に行われる最も大規模な子安講をオビシャと呼び、この日に菩提寺の鬼子母神が御開帳となる。この鬼子母神は現在も外部から信仰を集める。地区では小学生が1人だけになっており、高齢化で集落の維持管理が困難になっている
45	下野	-	?	×	数十年前に消滅
46	折戸	-	日 天	○	大字を4つに分けて実施。1月、5月、9月に実施していたが、現在は各地区が交代で実施。掛軸をあげ、神酒を飲む。
49	広根	-	顕	○	掛軸を返して講を解散したいという声も聞く。講を解散する際には、掛軸を返す

[附表B] 犬供養の実施形態（情報が得られた集落のみ抜粋）

調査順	大字名	集落名 (小区名)	寺院	現況	犬供養の実施形態
1	殿台	-	智	○	女性がお産で亡くなると実施。旧川岸（馬頭観音のところ）で供養していた。医学の進歩により現在は実施しない
2	富口	十区	日	○	春分の日に実施。通常の卒塔婆を立てる。十区・十一区合同か
3	小泉	-	天	○	2月に実施。寺に頼んで1本卒塔婆を用意してもらい、村境などに立てる
4	富田幸谷	-	系	—	実施しない
5	上横地	上里	天	○	正月に実施
6	〃	原横地 (油里)	天	○	以前は実施していたと、祖母から聞いた記憶がある
7	〃	小柳	智	○	犬がお産で死ぬと実施。川岸で供養していた。現在は実施しない
12	〃	相台	智	○	昔は実施していたが、現在は殆ど実施しない
13	五木田	不明	顕	—	実施しない
24	〃	橋本	智顕	○	犬がお産で死ぬと実施。現在は実施しない
11	本須賀	北盛	智	○	昔は実施していたが、現在は殆ど実施しない
22	〃	岡	智	○	2月11日に実施。集まって掛軸を拝んだのち、決まった場所に卒塔婆を立てる。この卒塔婆に決まった名前はない。また、お産で女性が亡くなると、線香を持って3ヶ所のニョウレンサマを拝み供養する。これをニョウレン参りと呼ぶ
20	〃	京塚	智	○	犬がお産で死ぬと実施。現在は実施しない
15	〃	下荒場	智	○	犬がお産で死ぬと実施。金を出し合って茶菓子を買い、集まって茶を飲んで供養するだけだった。現在は実施しない
38	〃	白幡納屋	智	○	子安講の後に実施。海岸に小山を築き、線香をあげて供物をする。卒塔婆は立てない。また、子供が亡くなると、集落外のニョイリンサマを何箇所か回った
19	井之内	六軒家	?	○	相当前に消滅し、現在は実施しない
23	松ヶ谷	川代	智	—	実施しない
25	〃	瓜花	智	—	実施しない。また、子供が亡くなったり、犬が死んだりすると、不動堂へ拝みに行く風習があった。これをニョイリン参りと呼ぶ
9	〃	北ノ里	智	—	以前から実施しない
39	〃	関ノ下浜 (北川岸)	智	—	実施しない
41	〃	打出場	天	○	犬が死ぬと実施。臨時にカンノン参りを行う。通常のカンノン参りは春秋に行われ、打出場・中谷のコヤスサマと勝覚寺境内の子安地藏の計3箇所を回って拝んでいる。成東の波切不動尊へ行く地区もあるというが当地では行わない
40	〃	中谷ノ下 浜(南)	天	○	春秋の彼岸前に実施。また、犬がお産で死ぬと実施。塔婆を立て、成東の波切不動尊に参拝した。今は実施しない。当地では犬供養と呼ばずカンノン参りと呼んでいた
16	小松	中谷ノ下 岡	天	○	女性に子供ができると実施
8	〃	小松岡	天	○	年2回くらい実施
35	〃	小松浜	天	○	女性がお産で亡くなると実施。今は殆ど実施しない
34	木戸	木戸浜	天	—	実施しない
27	〃	上谷 (下)	浄	—	実施しない
28	〃	十二区	浄	○	犬が死ぬと実施。2ヶ所（川面と中根）の石仏を拝み、札・金・米を供えて供養した。
29	〃	川面	浄	—	実施しない

30	蓮沼口	川下	浄	○	犬がお産で死ぬと実施。また、女性がお産で亡くなると実施。米を供え、蓮花寺で作ってもらった卒塔婆を川へ流す。今は殆ど実施しない
44	蓮沼ハ	西岡	浄	—	実施しない
43	蓮沼ニ	九区	浄	—	実施しない
32	々	西浜	浄	—	実施しない
33	蓮沼平	平	浄	—	実施しない
54	本水深	—	天	—	実施しない
55	祝田	—	?	—	実施しない
53	高富	—	天	—	実施しない。女性がお産で亡くなると「お産供養」を実施した
52	本柏	—	天	—	実施しない
51	木刀	—	日	—	実施しない
50	武野里	中里	単	—	実施しない
48	借毛本郷	—	天	○	犬がお産で死ぬと実施。川の近くに行って供養を行う
47	下之郷	—	顕	○	子安講と同時に実施。現在は実施しない
46	折戸	—	日天	○	犬がお産で死ぬと実施。卒塔婆を川へ流す。本来お産が軽い犬がお産で死ぬことは縁起の悪いこととされた